

41794

教科書文庫

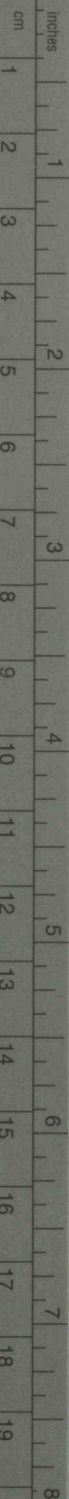
4
810
41-1944
20000 19405

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

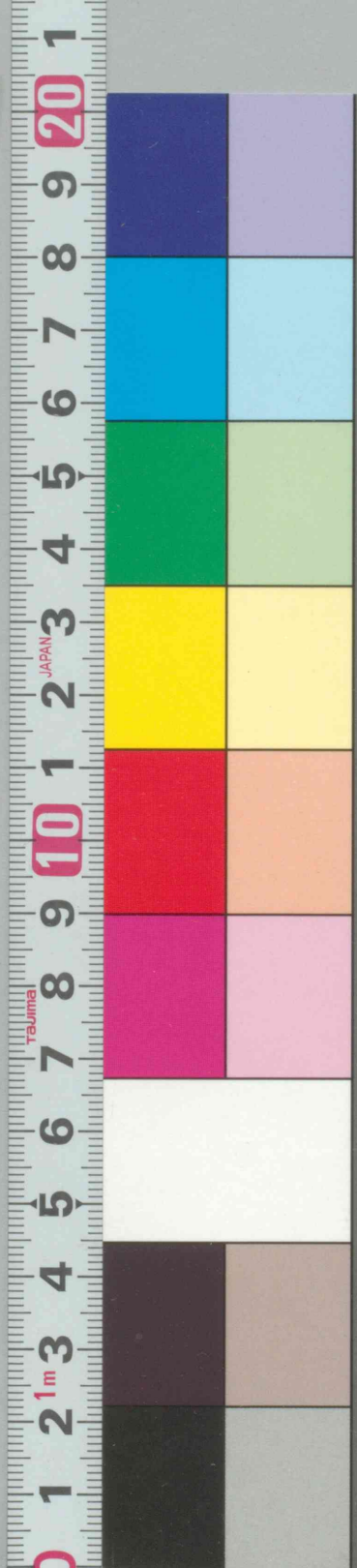
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3752
M614
資料室

中等國文一

文部省

(1)



資料室

395.7
M014

中等國文 一

文部省

廣島大學
圖書印

目録



一	富士の高嶺……………	四
二	産土神と氏神……………	五
三	松江の暁……………	九
四	菖蒲の節供……………	十五
五	姫路城……………	十九
六	戦國の武士……………	二十四
七	柿の花……………	三十三
八	涼み臺……………	三十四
九	武士氣質……………	五十五

十	親心……………	七十四
十一	朝のこゝろ……………	八十
十二	泉の徳……………	八十三



一 富士の高嶺

萬葉集

山部宿禰赤人の富士の山を望める歌一首並びに短歌

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河
なる 富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡
る日の 影もかくろひ 照る月の 光も見えず 白
雲も い行きはゞかり 時じくぞ 雪は降りける
語りつぎ 言ひつぎ行かむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に
雪は降りける

二 産土神と氏神

家が集つて村をなし、里をなす。そこには神社があり、鎮守の森がある。ちやうど、家の中に神棚があるのと同じである。家々がその神棚を祭つて團結し、和樂するやうに、村々里々は、その神社を中心として代々團結し、和樂して行く。或は小高い岡の上に、或はよく耕されたたんぼの間に、こんもりとした松杉などの木立に圍まれてゐるお宮がそれである。茂つた森の端に鳥居が見え、石燈籠が見える。これは、外國では決して見ることのできない景色で、わが國特有の歴史と國がらとを物語つてゐるものである。これが産土の社である。

産土神は郷土の守護神である。子が生まれると、お宮参りをす

る。これは、この郷土の一家に、新たに少國民が生まれたことを産土神にお知らせするのである。秋のみのりののちには秋祭が行はれ、この産土神の境内や附近で、宮相撲や村芝居が催される。神代の昔、天の岩戸の前で、神々が神樂を催されたやうに、村人はこゝに集つて神慮を慰め奉り、大人も子供も一しよになつて楽しむのである。

都會の大きな神社の祭には、昔はたいてい神輿をかついだり、山車をひいたりして賑はつたが、今は電線が縦横にかゝり、電車が東西に走つてゐて、さういふことは行はれなくなつた。しかし、家の中に金屏風を立て廻して山車の人形を飾り、軒ごとに提燈を掲げ、町内の子供が樽神輿をかついで遊ぶなどといふことは、今の東京にも遺つてゐる。また、境内の神樂殿では里神樂を奏し、家々では赤飯をたいて祝ふのである。

氏神は、同じ氏の人々の尊崇した神である。これは、家がだんだん大きくなり、分家の分家、またその分家が出来るといふやうに、一族が多くなつて来て、祖先を同じくする者が共同に祭つた神である。つまり、家の中の神棚を更に大きくしたやうなものである。藤原氏の氏神は奈良の春日神社で、そこには遠祖の天兒屋根命が祭つてある。源氏の氏神は八幡宮で、頼義・義家以來、男山八幡を尊崇すること厚く、義家はその社前で元服をして、八幡太郎義家と名のつたほどであつたので、代々八幡宮を氏神とすることとなつたのである。これは、いふまでもなく家を重んじ、祖先を尊ぶ風から起つたものである。しかし今日では、各市町村の住民は、本籍の人はもとより、寄留してゐる人でも、その神社を産土神として祭

り、その氏子になるのであるから、産土神はまた氏神でもある。郷土の神、氏の神、いづれも祖先以來切つても切れないつながりがある。われ／＼はこれを中心として團結し、これに守られて郷土の平和と幸福を保つて行く。だから、産土神はまた鎮守の神でもある。郷土を離れて遠方に出た者の、常に忘れることのできなものは産土の社である。出征した兵士の夢に入るのも、なつかしい産土神の森であり、ひとり山田を守る父老があつばれ、わが子も大君のために盡くすことができるやうにと日夕祈るのも、この産土神である。

われ／＼は、産土神を通じて、深く皇國につながり、また歴史につながつてゐるのである。

(芳賀矢一ノ文ニ據ル)

三 松江の曉

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど、耳の底でゆつくりと大きく搏つてゐる脈のやうに響いて来る、にぶく、太く、柔かな衝撃の音だ。その規則正しさと、こもつたやうな深さと、聞えるといふよりはむしろ感じられるやうに、枕の下から揺れ上つて来る趣とは、心臓の鼓動に似てゐる。それは米搗きの音である。米を搗く杵は大きな木槌で、一丈五尺ほどある柄が、支柱の上に横杆のやうに取りつけてある。米搗きの男は、先づその柄の先を全身の重みで踏み下げて、向かふ端にある杵を上げる。それから、足の力を抜くと、今度は杵が自身の重みで臼の中に落ちる。この一定の拍子で、こもつたやうに響いて来る杵の音が、日本人の生活に伴な

ふあらゆる音響の中で、最も感じの深いものに思はれる。米搗きの音は、日本といふ國土の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の鐘がごうんと響き渡つて、街の上空を揺るがせる。續いて、近所の地藏堂から、太鼓の響きが晨の勤行の時を告げる。それから、いち早く出て來た物賣りの聲が聞えだす。

「大根やい。燕や燕。薪や薪。」

明け方のこんな物音に呼び起されて、私は二階の障子をあげ、川ぞひの庭から伸びてゐる若葉の軟かな緑の雲越しに、朝景色を眺めやる。大橋川の幅の廣い、鏡のやうな川口が、遠くの方でわななくやうに萬象を寫して、ほのかに光つてゐる。この川は、矢道湖から流れ出で、湖は右手へ廣がり、果ては模糊たる連丘に包まれてゐる。直ぐ對岸の家々は、まだ戸をしめきつてある。夜は明けたが、

日はまだ出ない。

ふうはりとした水煙にひたつて夢心地であつた早朝の色が、今や眠りから抜け出して、はつきりした蒸氣となつて立ちのぼつて行く美しさ。遙かに見渡すと、薄色の霞が、湖水のはづれに長くかつつてゐる。昔の繪本で見る通りの星雲狀の長帶である。しかし、この實景を見ない人には、あの繪本の景色も、畫工が奇を弄したものとしか思はれないであらう。それが、山といふ山の裾をおほひ、又、峯から峯へ渡つて、或は高く、或は低く、果て知れぬ長さの紗のやうにたなびいてゐる。そのため、湖水は實際よりも遙かに大きく見え、夜明けの空と一つ色に融け合つて、美しいまぼろしの海となつてゐる。山々の峯は、さながら霧に浮かんだ島となり、夢のやうな一帯の丘陵は、果てしのない堤かと怪しまれる。うるはしい混

沌の世界である。霧が立ちのぼるにつれて、その趣は徐々に、しかも絶え間なく變化して行く。朝日の黄色な縁が見えて來ると、今までよりは更に強く、更に細い、紫色と青貝色の光線が水面を射る。梢の上部は弱い光を受ける。水のかなたの高い建物の面は、美しい靄のためにもうくたる黄金色に變る。

朝日の方へ向かふと、橋ぐひのあまた立ち並んでゐる木造の橋のかなた、長い大橋川の方に、船尾のあがつた一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。私はまだ、こんなに異様に美しい船を見たことがない。まさにこれは蓬萊の夢だ。霞のためにいひやうもなく醇化されてゐる。いはば船の精である。しかし、この精は雲と同じく朝日の光を受けてゐるので、一見、半透明な金色の霞で出來た一箇の實體となつて、薄青い光の中にかゝつてゐる。

今度は、庭先の川端から手を拍つ音が起つて來る。一回、二回、三回、四回。その手の主は植込みにさへぎられて見えない。しかし、對岸の船着き場の石段をおりる男や女が見える。めいゝ、帯に藍染めの手拭をはさんでゐて、顔と手とを洗ひ、口をすゞぐ。これは、神を拜む前に必ず行ふ潔齋である。それから朝日に向かひ、四たび手を拍つて拜む。長い高い橋の上からも、別な柏手の音が反響のやうに聞えて來る。遠くにある、軽い、優美な、新月のやうに彎曲した小舟からも聞えて來る。このすばらしい舟の上に立つて、手も足もはだかの漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。今や柏手の音はだんく増して、遂に鋭い音の連發となつた。それは、人々が總べて皆朝日——お日様を拜んでゐるからである。朝日に向かつてだけ手を拍つ者もあるが、大抵の者は、ま

た西の方杵築の大社へ向かつて、顔を東西南北へ次次に向けて、神々の御名を低く唱へる者もずるぶんある。お日様を拜んだあとで、一畑山の高峯を仰いで、盲人の眼を開き給ふといふ薬師如來の大伽藍の方に向かひ、手を合はせる者もある。

手を拍つ音が止んで、一日の仕事が始る。からころといふ下駄の音が、だん／＼高くなつて來る。大橋の上で鳴る下駄の音は、速くて、陽氣で、音樂的で、盛んな舞踏の音のやうだ。實際、これは舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日のさした橋の上を通る、無数の人の足がちら／＼するのは、驚くべき光景である。その足は皆、小さくて、均齊を得てゐて、いかにも輕やかである。

やがて、學校へ急ぐ子供たちが出て來る。かれらの駆ける時、美しい緋の着物の廣い袖がひら／＼するのは、大きな蝶が羽ばたきするやうである。

親船は白や黄の大きい翼を擴げ、埠頭のそばで夜中眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐き始める。
(小泉八雲ノ文ニ據ル)

四 菖蒲の節供

一年に二度、幼い者のために節供の祝ひがあるのはうれしい。女の子のために三月の桃の節供、男の子のために五月の菖蒲の節供があるのはうれしい。

あの三月の節供に取り出されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の節供を祝ふためにあるものは、鍾馗と鬼と金時と桃太郎などの行列だ。五月の空に高くひるがへる鯉轎は、子供の國をそこに打ち建て

たかのやうにも見える。狭苦しい町の中にあつても、あちこちの屋根の上に鯉轍を望むのは楽しい。うろこを描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩。動きを喜ぶ子供の心を楽しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供の心に返すものは、あのはた〜と風に鳴る鯉轍の音だ。五月の節供を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒に葺く菖蒲までが、お伽の國の情調を誘ふのも懐かしい。

五月の節供を迎へる頃は、何といつても季節の感じが深い。桃櫻は過ぎ去り、椿や木蓮にもおそく、山吹や藤や満天星などの花の香氣を放つ五月の初めは、一年のうちの最も楽しい季節の一つだ。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、雨でも降れば、裕では寒いこともあるが、私たちの周圍は、もはや若葉の世界だ。このよい時

候に、楽しい菖蒲の節供がやつて來る。

桃の花が女の子にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の子にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形もよい。爽かた、みづ〜しい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、やさしい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯があつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私たちの身をも心をも温めてくれるのもうれしい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中をかき分けて湯槽にひたるのも楽しみだし、あの葉が私たちの肌へべつたりとついた時の心持も悪くない。

粽のかをりは幼い日のかをりである。粽ばかりは、ひなびた所で作られるものほどよい。あの細長い粽の葉の巻きつけてあるのを解いて、青い色に蒸されたかをりをかいだ子供の頃の心持は、

今だに忘れられない。粽のほかには柏餅、赤の御飯などと敷へて来ると、五月の節供を祝ふもので、何がなしに懐かしい思ひを誘はなぬものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣もする。

この節供を祝ふために、私の家の近所にも大きな轆竿が立つた。矢の形をした風車を竿の先につけたもので、青葉に埋められた谷底のやうな私の家の前あたりからは、高く見上げるやうな位置にある。きのふの夕方、私はそこを歩き廻りに行つて、坂の下まで歸つて来ると、隣家の男の子が、おばあさんの背中につかまりながら、じつと岡の上の風車の動くのを見つめてゐるのにあつた。私はその男の子の顔を見守りながら、しばしそこに立つてゐた。漸く數へ歳の二つに、しかならないやうな幼い子供にも、そんなに眼

にうつるものがあるといふことは、或る深い印象を私に與へた。

(鳥崎春樹ノ文ニ據ル)

五 姫路城

大手の櫻門から三の丸にはいると、姫路城の天守閣は、姫山の老松の上にその正面を見せる。まことに白鷺城の名にそむかない美しい姿である。しかもその美の極致を、私は菱の門をくゞつて二の丸にはいつた瞬間に見出した。

から壕を隔てて、やゝ右手に仰ぐ天守閣群は、五層の大天守を右に、三層の西の小天守を中に、同じ三層の乾いぬの小天守を左に、いかにも調子よく、高い石垣の上にそびえてゐる。みやびやかな唐破風かすつきりした千鳥破風、それらが上下に重なり、左右に並び、千鳥が

けに入りちがふさまは、まさにいらかの亂舞といひたい美しさである。

ところで、更に「いの門をくゞり、ろの門をくゞつて、奥へくゞと進むにつれ、姫路城はたゞ美しいといふだけではすまされなくなつて来る。門をくゞるたびに、坂道は必ず右か左へ曲折する。道に沿うて、時に石垣塀櫓が層々と頭上にのしかゝる。まるで絶壁の下を通るかたちだ。さうして、その塀や櫓にうがたれた矢狭間、鐵砲狭間が、圓形に、三角形に、長方形に、ちやうど怪物の目のやうに、私たちを見おろすのである。どんな大軍が押し寄せたとしても、この狭い谷底のやうな迷路へ導かれ、あの無数の狭間から撃ちかけられ、射すくめられては、全くたまつたものではない。しかも、道を行く手くゞは、總べて嚴重な門である。

門をはいると、多くはそこに廣場がある。一般に、本丸への道は狭く、曲折してゐるから、敵の寄せ手かもし門を突破すれば、さし當りかうした廣場へなだれ込むに違ひない。さうして、激しく押し合ひもみ合ふかれらの足もとには、意外にも深い谷底が口をあけて待つてゐるのである。寄せ手が勢込めば勢込むほど、恐らくこの見せかけの廣場が役立つに違ひない。

一きは堅固に見える、ほの門を過ぎて、いよく本丸にたどり着いたと思ふと、そこにはいはゆる水の門が、第一から第六まで順々に待ち受けてゐる。數歩にして門があり、殆ど門ごとに道が曲折する。頭上には乾の小天守、西の小天守及び大天守が、東の小天守と四つ目に並び、互に腕を組み合つて天にそびえながら、私たちを足もとにも寄せつけなまいとつた恰好をしてゐる。

水の第五門は、大天守と西の小天守とをつなぐ渡り櫓の眞下になつてゐる。一たびこの門をしめきつたら、四つの天守閣は一箇の獨立した城廓となつて、これだけでも數萬の敵に對し、いつかな動きさうにない。

外觀五層の大天守は、内から登ると七階であつた。さうして、あの美しいと見た天守の内部には、巨材が巨材と組み合つて、薄暗い各階にも、のすごく力闘してゐる。

最上階から眺めると、姫路市街はもとより、飾磨の平野が一目に見渡される。元來この城は、平野の中央、やゝ北寄りの姫山、鷺山に據つて營まれたもので、地は南に飾磨港をひかへ、西に中國街道を受けて、運輸交通の要路に當つてゐる。秀吉がこゝに目を着けて城を築き、更に家康に信任された池田輝政が、百萬石の威勢と將軍

のうしろだてによつて、今日に見る優美な、しかも堅固極まりないものに造りあげた。大手の門は南を固め、搦手の門は北東を押しさへてゐるが、この城の要害は寧ろ西にある。眼下に見る西の丸の櫓々は、鷺山をあたかも長城のやうにおほうて、西からの見すかしを防いでゐる。呼べば答へる間近さに、男山、景福寺山が、ちやうど海中の小島のやうに散在してゐる。いざといへば、これらの小山が總べて出城となつて、この城廓の護りとなるのである。中國・四國の大藩を目の上のごぶと見た家康が、輝政をしてこゝに金城鐵壁を築かせたのは、まことに故あることと考へさせられる。

南方、もしくは東方から望めば、優美そのもののやうな姫路城も、これを北から西から望む時は、まるでやうすを一變する。本丸の據る姫山、西の丸の據る鷺山は、屏風の如く連なり、麓に三條の壕を

めぐらし、**斧**を知らぬ密林におほはれ、その上にそゞり立つ天守閣は、あたかも司令塔の如く、數十の櫓は層々と重なり、**蜿蜒**と連なつて、まさに飾磨平野に浮かぶ一大戦艦を思はせるものがある。

美しい城だとは誰もいふ。しかも、姫路城は當時の最も堅固な城であつた。その本丸・二の丸・西の丸が、これほどまで完全に残つて、今日のわれ〜に昔の姿を殆どそのままに見せてくれる。まことに姫路城は、わが國城廓建築の粹であり、世界に誇るべき國寶である。

六 戦國の武士

常山紀談

人間五十年

永祿三年五月、今川義元大軍を率ゐ、織田信長を討つ。丸根鷲津

の砦を攻め落し、義元、桶狭間に着陣す。信長は、かねて鳴海に討つて出て、防戦せん、の志なり。老臣ども、大敵なれば清洲を守り給へ。と諫むれども聞き入れず。酒宴して、猿樂に羅生門の曲舞を舞はせし時、敵既に攻め來たるとの報あり。信長少しも騒がず、人間五十年、下天の内を比ぶれば夢幻の如し。といふところを押し返しうたひて、忽ち法螺を吹き立てさせ、物の具して、主従僅かに六騎、歩卒二百人ばかり駈け出でて、熱田の宮に詣で、願文を神殿に納むる間に、軍兵追つつき來たりけり。

東を見れば、鷲津丸根攻め落されたりとおぼえて、黒煙立ちのぼる。濱手は潮満ちたれば、笠寺の東の道を一文字に進んで、砦々の味方に使を馳せ、その兵を引き具し、中島の砦に到るや、わが謀は、今川の大軍悉く本道へ繰り出し、旗本小勢ならんところ、山陰より

切つてかゝり、忽ち勝負を決するにあり。」と大音聲に下知しければ、士卒皆きほひ勇みけり。

旗をしぼらせ、山陰より桶狭間に打ち向かふ。義元は駿州の先陣打ち勝ちたりと喜び、酒宴してありしに、折しも天俄かに曇り、夕立うつすに似て、風雷烈しかりければ、信長の兵かゝり來たる物音も聞きわかず。不意の戦にあわてたるばかりなり。義元の網代の輿を信長見て、敵の旗本疑ひなし。とて、追つたて追つたて戦ひしかば、義元も返し合はせて戦ひしを、服部小平太槍をつけ、毛利新助その首を取りたりけり。

嶺の煙

天正三年、武田勝頼、奥平信昌が三州長篠城を圍み攻む。家康、援兵を信長に請ひ、後卷きの謀をめぐらす。既に城中糧米盡きんと

せしかば、この旨を告げんため、鳥居強右衛門勝商に命じ、ひそかに城を出す。勝商、脱れ出づることを得ば、向かふの雁峯が嶺に煙を擧ぐべし。三日過ぎて、またかの山に煙を兩度擧げなば、後卷きなしと知り給ふべし。三度擧げなば、後卷きあることを知り給へ。」と約しければ、信昌、鈴木金七郎を勝商に添へて遣す。

五月十四日の夜、城の西なる山の岩根を傳ひ、川に入る。寄せ手もとより大野川、瀧川の水底に繩を張りて、鳴子をかけたれば、通るべきやうもなし。二人水練の達者にて、川の淺瀬はよく知りつ。小脇指を抜きて、川底をくゞり、繩を切つて通りしかば、鳴子からかると鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、その中の一人、五月雨には、かゝる川をば鱸の通るならん。」と言ひければ、さて止みぬ。二人は早瀧の下、廣瀬といふ所にあがり、雁峯が嶺にて煙を擧げ、十五日

に岡崎に参りて、しかゞの由を申すところに、信長、その日岡崎に着陣す。

勝商、信昌なほ心もとなくや候はん。忍びて城に入るを得ば、はや後巻き候べきことつまびらかに申さん。とて引き返す。鈴木は、「信昌が父、美作守貞能に告ぐべし。」とて勝商に別れけり。

勝商、雁峯が嶺に上り、合圖の煙を三度擧げてのち、篠原といふ所に行き、忍び入らんとするに、柵重々に作り、砂をまき、出入の人の足跡をあらためしかば、なか／＼入るべきやうもなかつたためらひけるを、穴山の手の者見つけて怪しみ、遂にからめけり。

勝頼、武田信綱を以つて子細を問ふに、勝商事の由をありのまゝに答へしかば、勝頼、勝商を呼び、汝が命を助くべし。汝、城際に行きて、「信長は上方の軍にて、この城の後巻き思ひも寄らず。」言はば、城

兵降参すべし。さらば汝に厚く賞せん。」言ひしかば、勝商即ち、心得候。」とて、城門近く到り、後巻きとて、信長父子、岡崎まで昨日旗を出され、先陣は一の宮に陣せり。徳川殿御父子、野田まで御馬を出されたり。この城、運を開かんこと、掌のうちにある。」言ひければ、甲州の者ども大いに驚き、勝商を引き連れて勝頼にかくと申せば、勝頼大いに怒り、城に向けて、礮にして殺させけり。

長篠にて勝頼敗北してのち、信長を始め勝商が無雙の剛勇を感じ、ねんごろに作手の甘泉寺に葬りけり。

缸破り柴田

元龜元年、佐々木承禎、柴田勝家の守る長光寺の城を圍み、遂に總構へを打ち破る。勝家、本丸にありてこゝを先途と防ぎ戦ふ。

郷民、佐々木が陣に行きて、この城は水の手遠く、遙かなる所より

水を取り候。それを取り切るほどならば、城は保つべからず。」と告げ知らせければ、承禎喜びて水の手を取り切りたり。城中これに苦しめども、弱りたる色を表さず。承禎これを見んため、和平せんとて、平井甚介（すけのすけ）を使として城中に入れたり。

平井勝家（かつと）に對面し、手水を請ふ。缸（かま）に水満ちたるを小姓兩人して舁（か）き出でたり。平井手を洗ひければ、小姓残れる水を庭に捨てぬ。平井歸りてかくと言へば、事の違ひたるを怪しみあへり。

かくて、城中既に水盡きければ、勝家「明日は討つて出で、切り死せん。」とて、諸士を集め最後の酒宴す。残れる水を問へば、「二石ばかり入るべき缸を舁き出す。」さらばこの間に渴（かわ）をやめよ。」とて、人々汲み飲みければ、勝家即ち薙（な）刀（やま）の石突（つ）きにて缸を碎（くだ）きたり。

夜明け方に門を開き討つて出づ。佐々木、思ひも寄らざれば、大いに敗北し、勝家首八百餘級を得て、岐阜（ぎふ）に獻ず。勝家なほ長光寺にあり。信長、感狀を與へ、賞すること大方ならず。これより、勝家を「缸破り柴田」と世に稱しけり。

山吹の花

太田左衛門大夫（だいたい）持資（もちすけ）は上杉定正の長臣なり。鷹狩（たかとり）に出でて雨にあひ、或る小家に入りて、蓑（かさ）を借らんことを請ふに、一人の若き女出で來たり、何とも物を言はずして、山吹の花一枝を折りて出しければ、「花を求むるにあらず。」とて、怒りて歸りけり。或る人これを聞きて、「それは、

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき
といふ古歌のこゝろなるべし。」と言ふ。持資驚き、それより歌に志を寄せけり。

定正しよ下總しもに軍を出しし時、山際やまぎはの海うみを通るに、山上やまかみより弩やぶゆみを射かけられんや、又潮満ちたらんやはかりがたし。とて危ぶみけり。折ふし、夜半よなかのことなり。持資もちすけ「いざ、われ見來たらん。とて、馬を馳せ出し、やがて歸りて、潮は干たり。」と言ふ。「いかにして知りたるか。」と問ふに、

「遠くなり近くなるみの濱、千鳥鳴く音に潮の満干をぞ知ると詠める歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ。」と言ひけり。

又、いづれの時にや、軍を返す時、これも夜のことなりしが、利根川を渡らんとするに、暗さは暗し、浅瀬も知らず。持資また、

「底ひなき淵やは騒ぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたてといふ歌あり。波音荒き所を渡せ。」と言ひて、事なく渡しけり。持資のちに道灌みちくわんと稱せり。

七 柿の花

正岡子規

- 一 柿の花土堀の上にこぼれけり 柿の花は土堀の上にはこぼれけり
- 二 満山の若葉にうつる朝日かな 満山の若葉にうつる朝日かな
- 三 片隅にあやめ花咲く門田かな 片隅にあやめ花咲く門田かな
- 四 藻の花や水ゆるやかに手長鰻 藻の花や水ゆるやかに手長鰻
- 五 雲の峯水なき川を渡りけり 雲の峯水なき川を渡りけり
- 六 苔清水馬の口籠をはづしけり 苔清水馬の口籠をはづしけり
- 七 椎の木を伐り倒しけり秋の空 椎の木を伐り倒しけり秋の空
- 八 鴟うしなくや一番高い木のさきに 鴟なくや一番高い木のさきに
- 九 稻妻や一本杉の右左 稻妻や一本杉の右左
- 十 赤とんぼ筑波に雲もなかりけり 赤とんぼ筑波に雲もなかりけり

鳥ないて赤き木の實をこぼしけり
さらくくと竹に音あり夜の雪
崖急に梅こととく斜めなり
菜の花の四角に咲きぬ麥の中

八 涼み臺

新星

毎年夏になつて、そろそろ夕方の風がこひしい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持ち出される。これが持ち出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しい區切りをつける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふことが、誰かの口から言ひ出される。しか

し、その翌日が雨であつたり、さうでなくてもいろいろの事にまぎれたりして、つい一日、二日と延びる。そのうちに、いよいよ今日はといふことになつて、朝のうちに物置の屋根裏から臺が取りおろされ、一年中のほこりや黴が濡れ雑巾で、いねいに拭ひ清められ、それから裏庭の日かげで乾かされる。さうして、いよいよ夕方になつて中庭に持ち出されると、はじめて、私の家にほんたうの夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺のほかに、折り疊み椅子が三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明かるい宵のうちには、繩とびをする者もあれば、寫生帖を出しておばあさんの後姿をかいてゐるものもある。明朝咲く朝顔のつぼみを數へて報告するのもある。幼い女兒二人は、縁側へいろくにお花を並べて、花屋さんごつこをすることも

ある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺お伽ばなしをしたり、おばあさんに「お國の話」をさせたりしてゐる。幼い子供らには、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の妖精まじの國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば、郷里の家の前の流れにあひるがたくさん遊んでゐて、夕方になると上流の方の飼主が、小舟で連れに来るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを幼い頭の中に描かせるとみえる。それで、いつも「お國の話」をねだつては、おしまひに「私もお國へ行きたいなあ」と一人が言ふと、もう一人が同じ言葉を繰り返すのである。子供らの祖父の若かつた頃の昔話もしばしば出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがもう遠いく昔の出來事であつて、數年前ま

で生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして、祖父を見たことのない、或はおぼろげにしか覺えてゐない子供らには、會津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないであらう。さうしてそれだけに、却つて祖父に對する懐かしみは淨化され、純化されて、子供らの頭の中の神殿に納められるのであらうと思はれる。

今年の夏、涼み臺が持ち出されて間もなく、長男が、宵のうちに南方の空に輝く大きな赤みがかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見ると、それは黄道に近い所にあるし、ちらちらまたゞきをしないから、いづれ遊星には違ひないと思つた。さうして、近刊の天文の雑誌を調べてみると、それが火星だといふことがわかつた。星座圖を出して來てあたつて見ると、それは處女宮の一等星スピ

カの少し東にあるといふことがわかつた。それで、その圖の上に鉛筆で現在の位置を記し、そのわきへ日附を書いておいて、この夏中のこの遊星の軌道を圖の上で追跡してみようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座圖を出して目立つた星宿を見比べてゐた。その頃は、まだ織女や牽牛は宵のうちには、かなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が、屋根越しに、氷のやうな光を投げてゐた。

空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜中空を見張つてゐる話をして、それから新星の發見に關する話もして聞かせた。主だつた星座を暗記してゐれば、素人でも新星を發見し得る機會はあるといふことも話した。

一秒間に二十九萬九千キロを走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな、ばくだいな距離を隔てて散布された天體の二つが、偶然接近して新星の發現となる機會は、例へば釋迦の引いた譬喩の、盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられるほどすくなさうであるが、天體の數のばくだいなために、新星の出現はそれほど珍しいものではない。たゞ光度の著しく強いのが割合ひに稀である。こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふことであつた。わが家の先祖の誰かが、どこかでどうかしてゐたと同じ時刻に、遠い宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世にこの世界に届くといふことである。八月になつてから、雨天や曇天が暫く續いて、涼み臺も片隅の戸

袋に立てかけられたまゝに幾日もたつた。

或る朝、新聞を見てみると、今年卒業した理學士某氏が流星の觀測中に、白鳥星座に新星を發見したといふ記事が出てゐた。その日の夕方涼み臺へ出て、子供と共にその新星を探したら、直ぐわかつた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐることは、織女牽牛が宵のうちに眞上に來てゐるのでも知られた。さうして、新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争ふほどに輝きまたゝいてゐるのであつた。

「暫くなまけたので、新星の發見をしそこなつたね。」と言つたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして、さうして、さも、おもしろさうに笑つてゐた。私はじょうだんのつもりで言つたのだが、子供には私の意味がよくわかるまいと思つた。それで、誤解をしないために、次のやうな説明をしておかなければならなかつた。

新星の出現する機會は、極めて少い。われ／＼素人が星座の點檢をする機會も、また甚だ少い。随つて、先づ新星が現れて、それからわれ／＼がそれを發見するといふ確率は、二つの小さな分數の相乗積であるから、つまりごく小さい物のまた小さい分數に過ぎない。これに反して、毎晩缺かさず空の見張りをしてゐる専門家に取つては、偶然は寧ろ主に星の出現といふことのみにあつて、われわれの場合のやうに、星と人とに關する二重の「偶然」ではない。強ひていへば、天氣の晴れ曇りや日常の支障といふやうな、偶然の出來事のために、一日早く見つけるかどうかといふことが問題になるだけであらう。

そのうちに、また曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がする。ど

うかすると、夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。随つて、星のことももう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事はこれから始るので、學者たちは毎晩曇つた空を眺めては、晴れ間を待ち明かしてゐることであらう。

線香花火

夏の夜に、小庭の縁臺で子供らのもてあそぶ線香花火には、大人の自分も強い誘惑を感じる。これによつて、自分の子供の時代の夢がよみがへつて来る。今はこの世にない親しかつた人々の記憶が喚び返される。

初め先端に點火されて、たゞかすかにくすぶつてゐる間の沈黙が、これを見守る人々の心を、まさに來たるべき現象の期待によつて緊張させるに、ちやうど適當な時間だけ繼續する。次には火藥の燃焼が始つて、小さな焰が牡丹の花瓣のやうに放出され、その反動で全體は振子のやうに搖れ動く。同時に、灼熱された熔融塊の球がだん／＼に成長して行く。焰が止んで、次の火花の段階に移るまでの短い休止期が、また名狀しがたい心持を與へるものである。火の球はかすかな物の煮えたぎるやうな音をたてながら、こまかく振動してゐる。それは、今にもほとばしり出ようとする勢力が、内部に渦巻いてゐることを感じさせる。突然、火花の放出が始る。眼にも止らぬ速度で發射される微細な火彈が、眼に見えぬ空中の何物かに衝突して碎けてもするやうに、無數の光の矢束となつて放散する。その中の一片は、また更に碎けて、第二の松葉、第三、第四の松葉を展開する。この火花の時間的並びに空間的分

布が、あれよりもつとまばらであつても、或は密であつてもいけな
いであらう。實に適當な步調と配置で、しかも十分な變化をもつ
て火花の音樂が進行する。この音樂の速度は、だん／＼に早くな
り、密度は増加し、同時に一つ／＼の火花は短くなり、火の矢の先端
は力弱く垂れ曲る。もはや爆裂するだけの勢力のない火彈が、空
氣の抵抗のためにその速度を失つて、重力のために拋物線を描い
て垂れ落ちるのである。私の母は、この最後の段階を「散り菊」と名
づけてゐた。ほんたうに、單瓣の菊のしをれかゝつたやうな形で
ある。「ちりぎく、ちりぎく、ちりぎく。」かう言つては、やして聞かせた
母の聲を思ひ出すと、自分の故郷に於ける幼時の追懷が、鮮明に喚
び返されるのである。あらゆる火花の勢力を吐き盡くした球は、
もろく力なくほとりと落ちる。さうして、この火花の音樂の一曲
が終るのである。あとに残されるものは、淡くはかない夏の宵闇
である。

實際、この線香花火一本の燃え方には、序破急があり、起承轉結が
あり、詩があり、音樂がある。ところが、近代になつてはやりだした
電氣花火とか何とか花火とか稱するものはどうであらう。なる
ほど、アルミニウムだか、マグネシウムだかの閃光は、光度に於いて
大きく、ストロンチウムだか、リチウムだかの焰の色は美しいかも
知れないが、初めからおしまひまで、たゞぼう／＼と無作法に燃え
るばかりで、拍子もなければ律動もない。それでまた、あの燃え終
りのきたなさ、曲のなさはどうであらう。

線香花火の灼熱した球の中から火花が飛び出し、それがまた、二
段、三段に破裂するあの現象が、いかなる作用によるものであるか

といふことは、興味ある物理學上並びに化學上の問題であつても、し詳しくこれを研究すれば、その結果は、自然にこれらの科學の最も重要な基礎問題に觸れて、その解釋は何らかの有益な貢獻となり得る見込みがかなりに多くあるだらうと考へられる。それで、私は十餘年前から、多くの人にこれの研究を勧誘して來た。特に、十分な研究設備をもたない人で、何かしら獨創的な仕事がしてみたいといふやうな人には、いつでもこの線香花火の問題を提供した。しかし、今日まで、まだ誰もこの仕事に着手したといふ報告に接しない。結局、自分の手もとでやるほかはないと思つて、二年ばかり前に少しばかり手を着け始めてみた。ほんの少しやつてみただけで得られた僅かな結果でも、それは甚だ不思議なものである。少くも、これが將來一つの重要な研究題目になり得るであらうといふことを認めさせるには十分であつた。

このおもしろく有益な問題が、從來、誰にも手を着けられずに放棄されてゐる理由が、自分にはわかりかねる。恐らく、文献中に見當らない。即ち誰もまだ手を着けなかつたといふこと以外に、理由は見當らないやうに思はれる。しかし、人が顧みなかつたといふことは、この問題のつまらないといふことには決してならない。

藤の實

夕方(昭和七年十二月十三日)、外から歸つて居間の机の前へ坐ると同時に、びしりといふ音がして、何か座右の障子にぶつかつたものがある。子供がいたづらに小石でも投げたのかと思つたが、さうではなくて、それは庭の藤棚の藤豆がはねて、その實の一つが飛んで來たのであつた。家の者の話によると、今日の午後一時過ぎ

から四時過ぎ頃までの間にひんぱんにはじけ、それが庭の藤も臺所の前のも、兩方申し合はせたやうに盛んにはじけたといふことであつた。臺所の方のは、二メートルぐらゐを隔てた障子のガラスに衝突する音がなかく、烈しくて、今にもガラスが破れるかと思つたさうである。自分の歸宅早々經驗したものは、その日の爆發の最後のものであつたらしい。

この日に限つて、かうまで目立つてたくさんに、一せいにはじけたといふのは、數日來の晴天でいゝ加減乾燥してゐたのが、この日更に特別な好晴で、湿度が低下したために、多數の實がほゞ一様な極限の乾燥度に達したためであらうと思はれた。

それにしても、これほど猛烈な勢で實を飛ばせるといふのは、驚くべきことである。書齋の軒の藤棚から居室の障子までは、最短

距離にしても十メートルはある。それで、地上三メートルの高さから水平に發射されたとして、十メートルの距離に於いて、地上一メートルの點で障子に衝突したとすれば、空氣の抵抗を除外しても、少くも毎秒十メートル以上の初速を以つて發射されたとしなければ、勘定が合はない。あの一見枯死してゐるやうな豆のさやの中に、それほどの大きな原動力が潜んでゐようとは、ちよつと豫想しないことであつた。この一夕の偶然の觀察が動機となつて、だんくこの藤豆のはじける機構を研究してみると、實に驚くべき事實が續々と發見されるのである。

それはとにかく、このやうに、植物界の現象にも、やはり一種の「潮時」とでもいつたやうなもののあることは、これまでもたびくゝ氣づいたことであつた。例へば、春季に庭前の椿の花の落ちるの

しい風はなくて、落葉は少しばかり横になびくくらゐであつた。同教授も始めてこの現象を見たと言つて、おもしろがりもし、又、喜びもしたことであつた。

この現象の生物學的機構に就いては、われ／＼物理學の學徒には想像もつかない。しかし、葉といふ物質が、枝といふ物質から脱落する際には、ともかくも、一種の物理學的の現象が發現してゐることとも確實である。この事は、われ／＼にいろ／＼の問題を暗示し、又いろ／＼の實驗的研究を示唆する。もしも、植物學者と物理學者と共同して研究することができたら、案外おもしろいことにならないとも限らないと思ふのである。

これとはまた全く縁もゆかりもない話であるが、先日、家の子供が階段から落ちてけがをした。それで、近所の醫師に來てもらつ

たら、ちやうど同じ日に、その醫師の子供が、學校の歸りに道路で轉んで鼻がしらをすりむき、おまけに鼻血を出したといふことであつた。それから二、三日たつて、家の他の子供が手提をすり取られた。さうして、電車の停留場の安全地帯に立つてゐたら、通りかゝつた貨物自動車の荷物に引つ掛けられて、上着にかぎざきをこしらへた。その同じ日に、家の女中が電車の中へ大事な包を置き忘れて來た。これらは、現在の科學の立場からみれば、まるで問題にも何にもならない事で、全く偶然といつてしまふよりほかはない事である。しかし、これが偶然であるといへば、銀杏の落葉もやはり偶然であり、藤豆のはじけるのも偶然であるのかも知れない。又、これらが偶然でないとすれば、前記の人事も全くの偶然ではないかも知れないと思はれる。少くも、家に取り込み事のある場合

に、家内の人々の精神状態が平常といくらか違ふことはあり得ることであらう。

年末から新年へかけて、新聞紙でよく名士の訃音^{ふいん}がひんばんに報じられることがある。感冒^{かんぼう}の流行してゐる時だと、それが簡単に説明されるやうな氣のすることもある。しかし、さう簡単に説明されない場合もある。

四、五月頃、全國の各所で殆ど同時に山火事が突發することがある。一日のうちに、九州から奥羽へかけて十數箇所に山火事の起ることは、決して珍しくない。かういふ場合は、大抵顯著な不連續線が日本海から太平洋へ向かつて進行の途中に、本州、島弧を通過する場合であることは、統計的研究の結果から明らかになつたことである。「日が悪い」といふ漠然とした説明が、この場合にはりつ

ばに科學的な言葉で置き換へられるのである。

人間がけがをしたり、遺失物をしたり、病氣が亢進^{かうしん}したり、或は飛行機が墜ちたり、汽車が衝突したりする「悪日」も、現在の科學からみれば、單なる迷信であつても、未來のいつかの科學では、それがりつぱに説明されることにならないとも限らない。少くも、さうはならないといふ證明も、今のところなか／＼むづかしいやうである。

(寺田寅彦ノ文ニ據ル)

九 武士氣質

藩ノ翰譜

弓矢の家

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦め手より攻め入るべき由の仰せ承りて、大阪を打ち立ち、夜を日

に繼ぎて馳せ下る。白河より白石に到るまでは、皆敵の中なれば、道ふさがりぬ。常陸の國を廻りて、磐城・相馬にさしかゝりて國に歸らんとするに、相馬また累代の敵國なり。恙なく通らんこと、かなふべからず。然るに、政宗僅かに五十騎ばかり引き具して、常陸の國を経て、磐城と相馬との境に到り、先づ相馬が許に使者を立て、「このたび、徳川殿、上杉を征伐し給ふによりて、政宗、搦め手より向かふべき由を承りぬ。路次既にふさがりて候ひしほどに、東路に從ひて漸くこの境に到りはべりぬ。餘りに道を早めて打ちしほどに、士卒悉く疲れぬ。願はくは、城下に旅館點じて賜はらんには、馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず」と言はせたり。長門守義胤これを聞きて、「あつばれ、運の盡きぬるやつばらかな。たゞにも伊達は相馬が年來の敵なり。ましてや、味方討たれん一方の大將

承るといふものを。いで、今宵一夜討して、案内知らぬ者どもをこゝかしこに追ひつめて、一人残さず討ち取つて、年來の仇に報い、今度の賞に預らばや」とて、やがて民家をしつらへて迎へ入れ、家の子郎從ら召し集めて、夜討のやうをぞ議したりける。こゝに、水谷三郎兵衛尉某、遙かの末座より進み出で、末座の意見恐れ入つて候へ共、既に僉議の座に連なりて候上は、心に存ずるところを申さざらんはそのせんなし。そも、窮鳥懐に入る時は、獵者もこれを殺さず」とこそ承れ。政宗ほどの大名が、既に年來の恨みを棄て、君を頼みて來たりしを、たばかつてやみく」と討たれんは、勇者の本意とするところにあらず。長き弓矢の瑕瑾なり。又、わが城を去つて、かの國の境駒が峯に到らんこと、行程僅かに三里。今日の日、未だ未の時にさがらず。政宗おのが境に到らんとだに思はば、

日、夕べならざる間に到りぬべし。それに、僅かの勢を以つてこゝに留ること、豈深き謀計なからざらん。唯同じくは、わが備へを全うして、かれに代つて夜を守り、先づこのたびは本國に返し給ひ、重ねて戦に臨まん時、尋常に軍して勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん。と申しければ、満座の輩皆この議に同じて、かれが旅館のあたりに糧料・魚塩・秣藁に至るまで積み置きて、夜に入り四面に篝火たかせ、兵どもに夜をめぐらせ、警衛心を盡くしてけり。

義胤が士ども、政宗が餘りに取り鎮めたる體を見て、にくし、いざかれがふるまひを試みん。とて、夜更けて馬一、二匹切つて放つ。雑人ばら走り散つて、以つてのほかに騒ぎのゝしる。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打ち掛けて、左の手に刀ひつさげて立ち出で、相馬殿の御人や候、御人や候。と言ひし時、さむらふ。とて参り

ければ、物音高う候。何事にや。政宗が雑人ばら、狼藉候はんには、よく鎮めてたべ。とて、また内にぞ入りにける。かくて、夜明けけれども立ちもやらず。巳の刻ばかりになつて、義胤が許に使して一禮し、靜かに馬をうつて行く。ひそかに人を附けて見せたるに、かの國境の駒が峯のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く充ち満ちて出で迎へぬ。

かくて、關が原の合戦事終り、天下悉く平ぎて、相馬既に世帯を沒收せられ、家亡ぶべきに極まる。政宗、徳川殿に訴へ申しけるは、相馬はたゞにも政宗が年來の敵なり。それに、上杉・石田らに與したるが一定に候はんには、政宗かれがために討たるべき時、到つて候ひしに、君の仰せ承り馳せ下る由を聞きて、忽ちにふるき恨みを忘れ、新しき恩を施して候ひき。これ偏に、かれが野心をさしはさま

ざりし故にあらざや。且つは又累代弓矢の家、この時に到つて長く斷絶すべきこと、まことに不便の至りなり。唯然るべくは、かれが本領安堵のこと、御許しをかうむらばや」と、折に觸れてたびく歎き奉りしかば、その事となく年月を経てのち、本領をぞ賜うだりける。

うれし泣き

天正十三年三月、徳川家康、背中に疔といふもの出で来て、既に危く見えしかば、内外の醫療、術を盡くしけれども、その驗なく、唯弱りに弱り、みづからもこれまでと思ひけるにや、宗徒の家人ら召し集め、あとくの事ども言ひ遺す。人々の周章いふに及ばず、士民百姓らに至るまで、その程々に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

本多重次枕に取りつき、泣くく「殿も定めて覚えさせ給ひな。重次が昔、この病を受けしに、立ちどころに驗得し良醫の候。かれを召して見せ試み給ふべし」と申す。「諸醫既に手をつかね、家康また死を決す。この上醫療そのせんなし。且つは命を惜しむに似たり」とて用ひ給はず。重次大いに怒つて、「かほど大事の腫物、かるくしく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。それにまた、良醫して治しまゐらせんとするをも用ひ給はず、失せ給はんこと、御心からとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫、術盡きぬと申す上は、かれらいかにか治しまゐらすべき。年老いたる重次が、御跡にさがつての御供かなふべからず。さらば御先へ參らん」とてまかり立つ。家康大いに驚き、「あれとゞめよ」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で、引きとゞめ、仰せらるべき旨

あらせられ候。」と言ふ。重次聲を怒らして、「最後の暇乞ひてまかり申すものを見苦しき殿ばらのとゞめやうや。」と罵りて出でんとす。「されば候。その人をとゞめよとの御使が、えこそとゞめねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」と言はれければ、「げには、さも候。」とて參る。

家康「汝は物に狂ひてかくは言ふか。家康未だ死し果てぬに。たとへ家康が命終るとも、汝らが世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。又、汝らも、いかにもして一日も世に残りて、若き者どもおきて掟して、わが家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、せんなき死の供せんとすることやある。」と仰せければ、「いや、それは人によつてのことに候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰せまでも候はず、犬死せん人の御供、そのせんなし。重次若年の昔より、こ

こかしこの軍に従ひて、眼射られ、指落され、足斬られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふほどのかたはは、重次が身一つに集つて、世に交はらんことかなふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも敬はれも仕うまつれ。殿のなくならせ給ひなば、他人までも候はじ、先づ御婿むこの北條殿、わが國々を取らんとし給はん、若き人々が、行く末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち別れて、氣おくれしはかゝしき矢の一筋をも射出すことかなふべからず。當家滅されんこと、またま睡ねをめぐらすべからず。重次それまで永らへて、「あの年寄つたるかたは者は、徳川殿の譜代にて、なにがしと言はれし家人かみんなるが、いかに惜しき命なれば、かく世には恥をさらすらん。」と後指されんこと、老いの恥、何事かこれに過ぎ候べき。この頃までも、武田の家人ら、御當家に召されて、さ

らぬ人にも手をつかね、膝をかゝめしを、世にもあはれに思ひしが、
今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿におくれまゐ
らせんが悲しきばかりにも候はず。わが身の果ても淺ましく、先
づ御先に死することにて候。と申す。「汝が言ふところことわり至
極せり。さらば、醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に到りて、
家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる恥を見
つべくとも、一日も生き残りて、のちの事よきに計らふべしと存ず
るやいなや。」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次い
かてまた仰せをそむきまゐらすべき。と申す。「さらば醫師召させ
よ。」とて召さる。

醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし。」と申せば、重次艾取りて
据う。灸の痛み覚えねば、艾を増し加ふ。やがて、いさゝか痛む由

仰せければ、薬をつけ、薬湯をも進めしに、その夜の半ばに、腫物潰れ
て膿水血おびたゞしう流れ出で、さしもの惱み立ちどころに滅じ
ければ、重次はうれし泣きに、聲を限りに泣く。伺候の人々、共に感
涙を流しけり。

大事の使

寛永十四年十一月十日、有馬玄蕃頭豊氏の家に猿樂ありて、人々
多く集り見る。柳生但馬守宗矩もこゝに行き向かつて、酒宴半ば
なるに、日既に未の終りばかりに及び、宗矩が郎等來たり、主を呼び
出して、君は未だ知らしめされずや。肥前の國高來の郡の土民百
姓ら、悉くに耶蘇の門徒にて、守護松倉殿に叛き、有馬の古城に立て
籠る由、筑紫より早馬來て告げ申すによりて、板倉内膳正殿追討の
御使をかうむり給ひ、はや御發向候ひぬ。と申す。宗矩聞きて、さら

ぬ體にて座に歸りて、亭主豊氏に向かひ、急ぎて宿所に歸るべき事出で來て候。足ばやき馬借し給へ。」と言へば、鞍置きて引つ立つ。急ぎ打ち乗りて、西をさして馳せ行き、品川に到りて、板倉は過ぎしや。」と問ふ。「今は遙かに延びさせ給ふらん。」と答ふ。鞍鐙を合はせて馳せ行き、川崎に到りてまた問へば、板倉殿は今二、三里も隔たらせ給ふべし。」と答ふ。日は既に暮れなんとす。せん方なくて引き返し、城に登る。

日はとく暮れてけり。近く侍ツカサふ人を以つて、宗矩申すべき事あつて伺候しぬ。」と申しければ、やがて御前に召されて、「何事にか參りし。」と尋ねさせ給ふ。宗矩畏まつて、今日さる人の許に酒盛りし候に、筑紫にて逆徒起り、内膳正追討の御使を承り、馳せ向かふと承りしほどに、仰せの旨と稱し、とゞめばやと存じ、馬を馳せて追ひかくれど、追ひつかず、日暮れ候故に、この由を申さんとて參りて候。」と申す。「何によりてか重昌をとゞめんと致しけるぞ。」と仰せ下されしかば、君はひたすらの土民百姓ら反逆せしと思し召さるればこそ、追討の御使かく軽く候ひつれ。總べて宗門に就いて起る軍は、大事のものに候。この定にては、重昌必ず討死仕るべし。いかにも謀りてとゞめばやと存じ候ひき。」と申す。以つてのほかに御氣色損じ、御座を立たせ給ふ。

宗矩次の間に伺候して、夜更くれどもまかり出でず。この由を聞き召して、重ねて御座に出でさせ給ひ、宗矩を召す。「重昌死すべしとは、何故かくは申すぞ。」とありし時、宗矩「さん候。それ、兵の道は勇を以つて旨と仕る。勇士は必ず死を恐れず。三軍の士をして悉くに死を恐れざらしめんことは、古への能く兵を用ふる者も及

びがたしと承りぬ。凡そ下愚の人、法を深く信じ候者は、わが法を固く守りて、死するを以つて身の悦びとす。これ百千の衆、悉く期せずして必死の勇士と變ずるの術にて候。遠くためしを引くまでも候はず。織田殿、兵威を以つて伊勢の長島を攻めて、多くの大將を討たせ、諸卒を失ひ、年を重ねてやう／＼に城を落さる。攝津の國、大阪の城をば遂に落し得ず、勅命をかうむりて、仲直りして、軍は終りて候。三河の國の一揆は、近く御家の事に候。去りし大阪の軍に、重昌未だ年若く候時だにも、數十萬騎の中に唯一人選み出されて、大事の使承つたる者なれば、これらの凶徒を滅さんに、何事かあるべき。且つは、當時御使承る上は、誰かその下知にそむくべき。など思し召されなば、事の違ひ候はんか。重昌が今少し位も高く、祿も厚く、又、年來重き職をもつかさどつて、常に世にも人にも恐れ敬はれて候はんには、まことによき御使にこそ候べけれ。今の重昌の身にて、西國の大名らの軍勢を催して、城を攻めんに、一度は御使を承りたるに、恐れて、その下知に従はんが、思ふにも似ず攻めあぐみて候はんには、重昌いかに思ふとも、心に任すべからず。その時に到りなば、御一門の人々か、さらずば宿老の中を、選みて、重ねて御使に遣さるゝよりほかあるべからず。さらんによつては、重昌何の面目あつてか、生きて再び關東に歸りて見參には入り候べき。あつたらしき御家人を失ひ候はんこと、まことに惜しく候へども、なほそれよりも、御使を承りたる者を、土民百姓のために討たせて候といふことは、永き天下の御恥辱にこそ存ずれ。あはれ、宗矩御許しをかうむらば、追ひついて、よくこしらへて、召し具し歸り參り候べし。とは、死んだりやするまじなしと、は、死んだりやするまじなしかるところなく申しければ、後悔の色見えしか

れ敬はれて候はんには、まことによき御使にこそ候べけれ。今の重昌の身にて、西國の大名らの軍勢を催して、城を攻めんに、一度は御使を承りたるに、恐れて、その下知に従はんが、思ふにも似ず攻めあぐみて候はんには、重昌いかに思ふとも、心に任すべからず。その時に到りなば、御一門の人々か、さらずば宿老の中を、選みて、重ねて御使に遣さるゝよりほかあるべからず。さらんによつては、重昌何の面目あつてか、生きて再び關東に歸りて見參には入り候べき。あつたらしき御家人を失ひ候はんこと、まことに惜しく候へども、なほそれよりも、御使を承りたる者を、土民百姓のために討たせて候といふことは、永き天下の御恥辱にこそ存ずれ。あはれ、宗矩御許しをかうむらば、追ひついて、よくこしらへて、召し具し歸り參り候べし。とは、死んだりやするまじなしと、は、死んだりやするまじなしかるところなく申しければ、後悔の色見えしか

ど、更にそれもかなひがたくや思されけん、夜いたく更けたり。ま
かり歸りて休み候へ。」と御暇賜はりて、御前を退出す。

のちに思ひ合はするに、宗矩が申ししところ、掌をさすよりも明
らかにぞ候ひける。

日ごとの祈誓

板倉周防守重宗は、伊賀守勝重が嫡男なり。この人の職に在り
し時の名譽、天下の稱するところ、また擧げて數ふべからず。

重宗職に任じてのち、日ごとに決斷所に出づるに、西面の廊下に
て、遙かに拜することありて決斷所に到る。この所には、茶臼一つ
を据え置き、明かり障子を引き立てて、その内に坐し、手づから茶を
ひきながら訴へを聞きわかづ。人皆この事どもを不審しあへり。
されども、問ふこともえならず。

遙か年經てのち問ふ人ありしに、先づ決斷所に出づる時に西面
の廊下にて拜することは、愛宕の神を拜するなり。多くの神のう
ちに、殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きしほどに、所願ありてかく
は拜しぬ。その所願といふは、今日重宗が訴へをことわらん、心
に及ばんほどは私の事あらじ。もし過ちて私の事あらんには、立
ちどころに命を召され候へ。年來深く頼みまゐらす上は、少し
も私心あらんには、世に永らへさせ給ふなと、日ごとに祈誓するに
て候。又訴へをわかづことの明らかならぬは、わが心の事に觸れ
て動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は、みづから動かさざらん
やうこそあらめど、重宗それまでのことはかなひがたし。唯、わが
心の動くと靜かなるとを試みるには、茶をひきて知る。心定まり
て靜かなる時は、手もそれに應じて、臼のめぐること平かにして、き

しられて落つるところの茶いかにこまかなり。茶のこまかに落つる時に到りて、わが心も動かぬと知り、そののち、やうやくに訴へをわかつ。又、明かり障子を隔てて訴へを聞くことは、凡そ人の面貌めんぱうを打ち見るに、憎さげなると、あはれがましきとあり。誠しきあり、かたましきあり。その品多くして、幾らといふ數を知らず。見るところの誠しと思ふ人の言ふことは、まことと聞かれ、かたましと見ゆる人のなすことは、何にても皆詐りと見ゆ。又、あはれがましき人の訴へは、曲げられたるところあるよと思はれ、憎さげなる人の争ひは、ひがごとならんと覺ゆ。これらの類ひは、わが目に見るところに心の移されて、かれが言葉を出さぬうちに、はやわが心のうちに、よこしまならん、正しからん、曲らん、直からんと思ひ定むるほどに、訴への言葉を聞くに到りては、わが思ふ方にその事聞

きなすこと多し。訴へのなるに及びては、あはれがましきに憎むべきあり。憎さげなるにあはれなるあり。誠しきに偽りかたましきが多きこと、この類ひ殊に多し。人の心の知りがたき、容かたちを以つて定めんことかなふべからず。古への訴へを聞くには、色を以つて聽くことあり。それは、おほはるゝところなき人のことなるべし。重宗が如きは、見るところにつきて、心おほはるゝこと多し。又、さなきだに訴への庭に臨んでは、恐しかるべきに、まして生殺をつかさどる人を見ては、まばゆくいぶせて、おのづから言ふべきことも、え言はで、罪にも科かにもあふ人あらんと思へば、所詮しよせん、互に面を見も見られもせぬには、しかじと思ひて、かくは座を隔つるにて候。と答へきとなり。

十親心

約束の松

雲萍雜志

名和又太郎長年は、その父嚴にして教訓の届きたる人なり。
 或る時、牛をひきたる童の、唄など歌ひて通りければ、長年はあと
 追ひ行きて、童に呼びかけ、われをその牛に乗せて、川ばたまで行け
 かし。と言ふに、童うけがひ、御身を乗せて行くべきが、賃には何をか
 賜はる。と言へば、長年わが家を顧みて、門に生ひたる松を指さし、い
 づれの樹なりとも、その方が望みに任すべし。とくくやれ。と言
 ふに、童喜びて、長年を川ばたまで乗せ行きたり。
 その後、三とせが程を経て、一人の男童を伴ひ、長年が家に來た
 り、長年が父に向かひ、三年以前の約束を物語る。長年をさな心の

戯れなれども、かの童はこれをまことと心得、牛に乗せたる賃をは
 たり、いかに言ひ解きても肯んぜず。いかゞはせんと言へば、長年
 が父、これを聞くより、さもありぬべし。約束なせしにたがひなく
 ば、切らせて遣すべし。とて、童に望ませ、門前なる大樹の松を柵に命
 じて切らせ、牛飼ひにとらせけり。
 里人は、これを言ひ傳へ、名和が約束の松と呼びて、今に話し傳へ
 たり。

詩歌の道

予はいとけなき頃より詩歌の道を好み、たま〜作文などせし
 折から、稿成りて父に見するに、一つとしてほめられたることなく、
 唯、無益の事なり。とて座右に投げ捨ておかれ、他の者のは見てほめ
 られければ、さりとてはいかゞとのみ思ひ過しぬ。

のち、妻に迎へたる女の物縫ふこと人にすぐれ、小袖など一日に一重ねづつ縫ひて、餘事までも事かゝねば、物縫ふ職人も驚くばかりなりけり。予、或る時、妻の物縫ふをひたぶるに愛で賞しけるに、妻の三歳にして母におくれ、繼母に育てられしが、いと厳しく、五六歳より水仕のわざをつとめ、七歳より手習ひ、物讀み、裁ち縫ひを教へられ、實の子ならねば、教訓足らずと、末に到りて、せしられんはくちをし。』とて、羽根つく遊びだにえせて、唯、物縫ふことなどのみに暇なかりければ、折からは烈しき母よと思ひしかども、今となりては、物縫ふわざを人にほめられはべるは、偏に繼母のなさけ薄からざりし慈愛なり。』と言へるを聞きて、予がいとけなき頃、作文をほめられざりしことのいとありがたきを思ひ合はせぬ。

一人の弟子

江戸下谷高岸寺といふに、いつの頃にか、弟子の僧二人ありけるが、一人は身持ち律儀にして、常々寺のためともなるべき事のみ、心を盡くせど、一人は戒行をも保たず、大酒を好み、いさかひなどして、よろづ私多かりしが、或る時、什物を取り出して賣らんとするを、一人の僧見て諫めけれども、聞き入れざりければ、この由を住持に告げ、かの僧、追ひ出し給はずば、寺のためにもなるべからず。』と言ふに、住持は、一先づ諭し見るべし。』とて、厳しく戒めたるまゝにて捨ておきぬ。

又或る時、佛具を取り出して賣りたるを聞きて、一人の僧、また住持が許に行きて、惡僧、このたびは佛具を盗み出して賣りたり。われら諫めたりとて、更に用ふるところもなく、住持も捨ておき給へば、是非に及ばず。われは、行く／＼禍の寺に及びて、身にもかゝら

んことを恐れ思へり。もし、かれを追ひ出し給はずば、われに暇を賜はるべし。」と言ふに、住持は涙を浮かべ、「さあらば、願ひのまゝにその方に暇を遣すべし。悪僧は今しばしわが傍らに置きて、おひおひ諭すべし。」と言ふ。この僧、大いに住持を恨み、われら暇を乞はば、悪僧を追ひ出し給はんと思ひしに、それを却つて罪なきわれらに暇賜はること、近頃依怙の心にあらずや。」と言へば、住持は答へて、「さにあらず。御身は今わが寺を出でたりとも、いづこへ行きても、はや僧一人の勤めはなるものなり。悪僧は今わが傍らを離れなば、忽ち捕らはれて罪人とならんもはかりがたし。さすれば、わが徳もすたれ、一人の弟子を失ふなり。故に、今しばしは傍らに置きて、かれが命をも延し、且つは厳しく教誡をもせば、善心に立ちかへることもあるべし。それを楽しみ、わが傍らをはなつことをせざ

るなり。」と言へば、悪僧もこの由を聞きて、師の高恩に感じ、やがて善心にかへりしとぞ。

石臼の目

予が閑窓のもとに、こつくと聞ゆる音、ひねもす止まず。いかなる物の響きにやと、窓押してこれを窺ふに、老いさらぼひし翁の、眼鏡をかけて、筵の上に石臼の目を切りぬたり。

予翁に問ふ、「石臼の目を切ること、その數、日々に幾ばくぞ。」翁答へて、「切る日もあり、切らざる日もあり。」と言ふ。また問ふ、「老翁齡幾ばくぞや。」答へて言ふ、「今年七十一なり。」と。また問ふ、「子孫ありや。」答へて言ふ、「娘あり。早く婿を迎へて、孫三人あり。」と。予曰く、「既に娘あり、婿あらば、老翁かゝるわざはせずともありなん。」と。翁の言ふ、家に六人のすぎはひするに、婿一人の働きにして、他にたすくる

輩なし。われ白の目を切りたりとも、活計を補ふべきの資力に足らずといへども、欠伸くつんのみに徒らに光陰を送らんよりは、せめて、鼻紙の料をもたすけばやと、かゝるあぶなきわざをもしつるなり。」と笑ひぬ。

人の親の子を思ふ恵み、たかきもいやしきも異なることなきいとありがたきものと思ひぬ。

十一 朝のこゝろ

橘曙覧

人に示したる

口そゝぎ手あらひ神をまづ拜む朝のこゝろをひと日
わするな

或る時作る

神國の神のをしへを千よろづの國にほどこせ神の國
人

正月ついたちの日古事記をとりて

春にあけてまづ見る書も天地のはじめのときと讀み
いづるかな

元旦

物ごとに清めつくして神習ふ國風こくにぶりしるき春は來にけ
り

雨あめいみじう降りつゞきて人皆たひわびにわびたり
ける頃めづらしう晴れそめたる空を見やりて

天地も廣さくはゝるこゝちしてまづ仰がる、青雲の
そら

春よみける歌の中に

すく〜と生ひたつ麥に腹すりて燕飛び來る春の山
はた

秋田家

いなごまろうるさく出でて飛ぶ秋のひよりよろこび
人豆を打つ

人あまたありてかね掘るわざものしをると
ころ見めぐりありきて

日の光いたらぬ山の洞のうちに火ともし入りてかね
掘りいだす
赤裸の男子むれゐてあらがねのまろがり碎く鋤うち
ふりて

黒けぶりむらがりたゝせ手もすまに吹きとろかせば
なだれ落つるかね
とろくれば灰とわかれてきはやかにかたまりのこる
白銀の玉

十二 泉の徳

平和な緑の色に一樣に取り包まれた沖繩の村々も、水の一
けには、著しい幸不幸がある。概していへば、新しい村ほど飲
の不自由を辛抱せねばならなかつたやうである。那覇など、
分古い港ではあるが、當初、今日ほどの繁榮を豫期しなかつた
に、近くによい井戸のある家はまことに少く、多くは入江の
落平の泉からはる〜と汲んで來て用ひてゐる。町を貫ぬく堀

川に潮が満ちて、翡翠の往來が次第に稀になる頃、ぎいと櫓の音をさせてはいつて來るのは、總べて水賣りの船である。酒屋の藏にあるやうな大桶に幾つも汲み入れて、家々に水を配つて廻るのである。又、しつくひをよくした町屋の赤瓦は、その第二の目的として、これで雨水を受け止める。その水を水槽に貯へて、お茶の水にまで使つてゐる家がある。

郊外に出て見ると、庭の木に斜めに繩を張つて、壺に僅かの雨の雫を集めようとしてゐる家もある。瓦葺きの多くなかつた時代には、これが最も普通の方法であつたらしい。八重山の石垣島などでも、私の見たのは福木の幹に一枚の棕櫚の葉を結びつけ、一尺ほど切り残した葉の柄の端から、樹下の小瓶へ雨水がしたゝるやうにしてあつた。

井戸をカハといふのは、必ずしも沖繩の諸島だけではない。九州でもひろくこれを平ガハと呼んでゐて、飲み水の供給が最初は皆天然の流れからであつたことと、その流れをせき止めて水をひと所にたゝへたのが、即ちキといふ語の起源であることを示してゐる。本土で普通に見る掘り井戸を、宮古でも八重山でもツリカトと稱へてゐる。釣瓶で水を釣る井戸の意味で、その釣瓶は蒲葵の葉で巧みに鸚鵡貝のやうな形に縫つてある。大事に使へば、一つが十日餘りももつといふ。この頃はブリキで作つた同じ形の釣瓶も出來たが、もとの蒲葵で製したものは輕過ぎて、使ひなれぬ者にはとても水があがらぬ。そればかりか、深いツリカーでも、水は幾らもなく、折々は新たに湧くのを待たねばならぬことがある。かういふ井戸へ村中から汲みに通ふ者は、他の多くの民族と

同じく、悉く村の女たちであつた。ツリカーに比べると、ウリカーの方が更に苦しい。

ウリカーは即ちおりて汲む井戸のことで、宮古の平良などには、こればかりしかないやうである。それも舊記には十箇所と記したものが、中にはもうまるで出なくなつたのもあれば、洗濯にしか用ひられぬ濁り水もある。人家の片わきなどに、おひくに掘りくぼめて、九丈、十丈と斜めにおりて行くウリカーのけはしい石坂を、石の稜がなめらかになるまで、毎日上下して僅かの水を頭に載せて来る。それが昔から皆女であつた。中世、島と島との恐しい戦の時、八重山の島から捕らはれて来て、深くてあぶないサカガ(白明井)の水を汲みに日ごとに追ひやられた美しい娘が、身の薄運を歎き、親を慕つた古歌が、今も宮古の島には傳はつてゐるが、そ

の清水は既にかれたと、古琉球の中にも書いてある。

或はかうした水までも足りなくて、はるく船に乗つてもらひに來なければならぬ島もある。沖縄本島では、國頭の古宇利の島、先島では多良間の北沖にある水納の島など、最も水にとほしい土地として知られてゐるが、大きい島でも、村によつては早の苦しみを惱みぬく所が稀ではない。

そのいろくの例を見たのちに、島尻地方などの岡の根方に、珊瑚岩層の割れ目から、澄み徹つた清水がこんくとして湧き、且つ流れてゐるのを見ると、實際、誰でも神の恩恵を考へずにはゐられない。

屋古の古村の共同井戸では、大木の蔭に石を疊み、泉の口では水を汲み、そのそばでは器を洗ひ、その下では衣をすすぎ、その末では

馬を冷し、數十人の娘たちがおもしろさうに一しよに働いてゐる。旅の鑄物師が来ては仕事をやるカンジャヤーと名づける小屋なども、瓦で葺いて水のそばに立つてをり、なほ下流に行くと、流れに橋があり、水車もこの水によつて廻轉し、數町歩の稻田もこれから水を得てゐる。凡そ一村の生活は皆この泉を中心とするかの如く、結局、水汲み場の唯一箇所であるのも、部内の親睦を増す道であるやうに思はれる。

琉球國舊記その他の古い書物に由來を傳へられた嘉手志川は、即ちこの清水のことである。屋古は名を改めて、今は大里と呼んでゐる。古くは南山城の西の麓、即ち絲滿の港から登つて來る大手の口にあつたのが、この泉を慕つて次第に岡の北側に移つて來た。嘉手志は沖繩語で、人の集つて來ることを意味するといふが、

果してさうであらうか。土地の一説によれば、古くはまたカタリガールとも稱へた。即ち傳説の存する泉といふことである。昔、大早の年に、人々が船を仕立てて、水をよその岸に求めようとしてゐるところへ、一匹の犬がびしよ濡れになつてやつて來た。不思議に思つて、暫く船出を見合はせ、その犬を先に立てて林の奥深くはいつて見ると、果せるかな、かくの如きりつばな清水が湧いてゐた。さうして、犬は水中にはいつて忽ちに石と化し、その石は今なほ泉の上に安置せられて、郷人の尊敬を受けてゐる。

古來の口碑はかくの如くであるが、他村の靈泉にも同じ類ひの話がある上に、東方諸民族の間に於いては、これは寧ろありふれた物語であつた。現に臺灣山地の部落の間にも、犬に導かれて清水を見出したといふ舊傳が幾つともなく存在するから、恐らくは、こ

の島にあつてもまた、話の方が泉よりもなほ一層古かつたのであらうが、かういふ傳説と結びつくところからみても、泉の徳は神の徳であつたことが、島に来てみて思はれるのである。

(柳田國男ノ文ニ據ル)

教科書番號 11ノ1

中等國文一

定價金三十六錢

文 部 省

著作權所有

著作
發行
者兼

東京都神田區岩本町三番地

中等學校教科書株式會社

代表者 山本慶治

發行
者

東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

大日本印刷株式會社

代表者 佐久間長吉郎

印刷
者

發行所

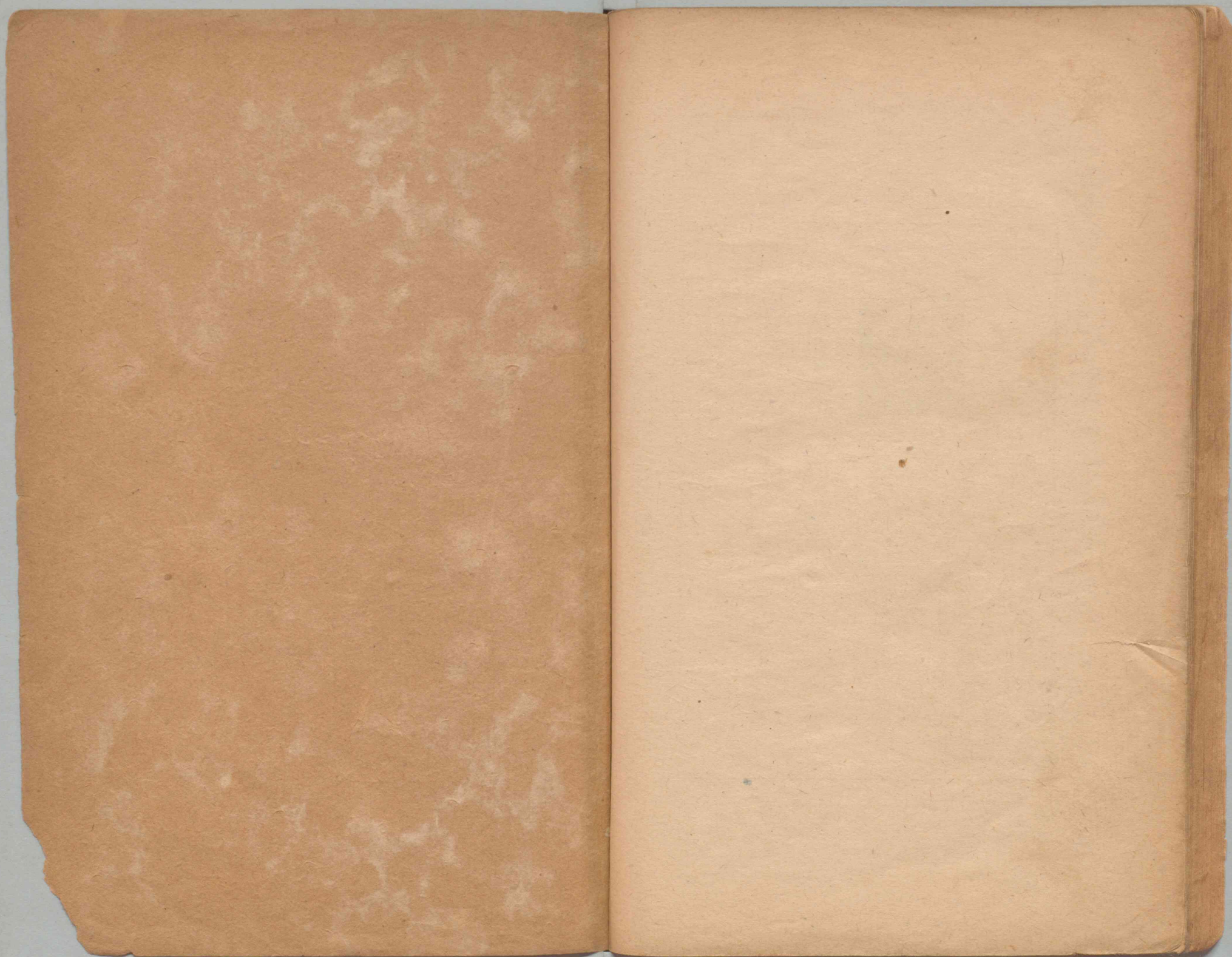
中等學校教科書株式會社

20

昭和十九年十二月十五日
文部省檢査日



昭和十八年十二月十四日
昭和十九年十二月十五日
昭和十九年十二月十五日
昭和十九年十二月十五日
昭和十九年十二月十五日
印刷發行
修正印刷發行
修正印刷發行
修正印刷發行



Tuyosi

Tuyosi

Tuyosi

Tuyosi

一
三

村 48

上

強